

ツアー 美ヶ原の自然を満喫(長野) その1

美ヶ原頂上の「雲上の一軒宿」と呼ばれる眺望の良い宿に泊まるのですから、気になるのは何と言っても天候です。

(予約の取りにくい宿としても有名で、幹事の苦心の様子は、末尾の補足でご覧下さい) 標高およそ2000mですから、平地よりも気温は10度以上低い事になります。雨だったらまことに哀しい事です。会員は皆天気予報の変化に一喜一憂していました。

1日目 9月29日(日)

冒頭から一波乱です。8時半過ぎ、JR京都駅に集まり始めていた私達に、大津から参加する会員から電話がありました。「乗っている電車が動かない」との事。ネットで運行情報を見ると「08時24分 京都駅～山科駅間の橋桁に自動車が接触したため、列車に遅れ」と云っています。影響を受けている会員は3名で、きっとハラハラしている事でしょう。9時8分発の新幹線に間に合わない恐れがあります。事前のシミュレーションに従って、「最悪の場合JR松本駅で合流する」ように電話連絡して、運行再開を待ちました。幸い3名とも、何とか新幹線の時間には間に合い、私たちと合流。新大阪から乗車して来た会員たちと共に、名古屋、そして松本を目指しました。参加者は、27名(男性13、女性14)です。今回は近畿旧友会のもう一つのハイキンググループ「平城山の会」にも呼びかけ、4名が参加されました。

列車内で昼食をとって、正午過ぎに松本駅到着。二組に分かれて、ボランティアガイドさんの案内で、松本市内を散策です。このところ日本列島は夏の暑さが居残って高温続きですが、この日の松本も最高気温は、29.7度でした。(この日の最高気温の平年値は22.2度)高原行きに備えて服装を秋バージョンに替えた会員もいて、暑い!暑い!の声頻り、私も汗びっしょりでした。

青空にそびえる国宝松本城は、黒を基調に端正な佇まいです。

天守の建造年は、1591～1615年

(安土桃山時代末～江戸時代初)まで、いくつかの説があり、結論は出ていません。

城の主は江戸時代初め頻繁に交替、1726

(享保11)年に戸田氏になり、以後幕末まで領知します。

廃藩後、城は売り出されたり、明治30年代頃から天守が大きく傾いたり、不遇な時代が続きますが、民間の力も得て保存され「明治の大修理」が行われて難を逃れ、また、

1950年から「昭和の大修理」が行われ、今日の姿が保たれているのです。



私は父親の仕事の関係で長野県内を転々として育ちますが、小学から中学にかけて1年半程は、松本に暮らしていました。丁度、この昭和の大修理が完成した頃で、凍てつく空気の中白銀の北アルプスを背景にそびえ立つ城の威容に感動したことを覚えています。この日登る美ヶ原は、松本市街の真東にそびえています。天守越しに見る事も出来ました。頂上に放送局や無線中継所のアンテナが林立しているの、分かりやすいのです。

松本城から北へ、旧開智学校です。今年、近代の学校建築として、国宝に指定されました。元は1876（明治9）年に町の中央を流れる女鳥羽川（めとぼがわ）沿いに建てられたのですが、水害もあり、1963（昭和38）年に90年間の学校としての役目を終えて、この地に移設されたのです。現在は教育博物館になっています。この学校の建設にも、民間の力が大きく働いていて、明治の初め、文明開化の教育を進めようと努力した町の人々の心意気が、この建物の意匠にも感じられますね。



ちなみに、私の母方の祖母は開智学校の出身で、なかなかハイカラな気質の凛としたおばあちゃんでした。



この日、市街では「街なか大道芸」が催されていて、30組を超えるパフォーマーが、路上会場を巡回しながら芸を披露していました。これもそのひとコマです。



松本はてまり歌を地域のテーマにしている、マンホールの蓋もてまりの模様ですが、大通りに巨大なてまりのオブジェがあって、からくり時計が時間で開いて演奏をするのです。

毎正時に演奏があるという事で、14時に間に合いました。てまり歌の演奏に続いて、これは松本のシンボルでもあるサイトウ・キネン・オーケストラの人形です。このオーケストラには、指揮者の小澤征爾さんを始め多くの著名な音楽家が参加しています。曲は「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」でした。



14時半松本駅に戻って、宿の送迎バスで美ヶ原に向かいます。標高差1400mを1時間半で登り、宿に到着しました。

ここは美ヶ原の最高地点「王ヶ頭（おうがとう）」標高2034mです。

宿に入って間もなく、辺りは一面霧に覆われ、雨が降り始めました。

17時半ごろの日没は見られず、「星空見学会」も残念ながら行われませんでした。

2日目の様子は、「その2」をご覧ください。

* * *

相変わらずの補足・蛇足で失礼します。

美ヶ原という呼び名

名前の響きは何処となく近現代のもののように感じられますが、何と文献での初出は江戸時代です。1724（享保9）年に松本城主水野忠恒の命で編纂された信州の地誌「信府統記（しんぷとうき）」は、こう記しています。「うつくしか原と云うあり、この原は山の上の平にて、凡そ二三里に及べり、是より富士山其外 近国の大山皆見ゆ」と。

ですからこの時代には既に地名として定着していたのでしょう。

48字ほどの記述ですが、貴重な48字です。

そして信州白田町の神職井出道貞が、信州各地を十数年にわたって渉猟した成果を、1834（天保5）年に「信濃奇勝録（しなのきしょうろく）」として書き上げました。（半世紀後1886（明治19）年に孫の井出通が出版）します。その中では、「美か原…北は不二（富士）浅間も綿々と連なりて見ゆ。南は諏訪を望み、湖水眼下にあり。

峰より半ばまでは寒気強く、常に霧深く寒風烈しくして草木育ちがたく、皆クマザサ、ワラビのみなり」



片石（へげいし）の事

「信濃奇勝録」は、この美ヶ原の項で、この地に産する不思議な石・片石（へげいし）について述べています。「へげ、へぐ」とは「剥ぐ、折ぐ」つまり「薄片」という意味のようです。

「風霧の気を感じてや岩壁みなへげて、大なるは6～7間、小なるは尺に満たず、みな板の如く薄く平らか」…「里人は是を取り来て、土庫

（ぬりごめ）などの屋根を葺く、永年朽ちずして瓦に勝れり」

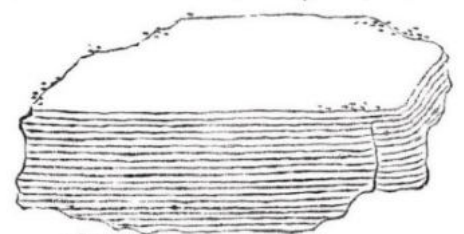
石が薄くはがれるのは、厳しい気候によるものと考え、ミルフィーユかバウムクーヘンの様な姿を、「片石重累（へげいしちょうるい）の図」として挿絵まで描いています。

美ヶ原では、この石は至る所に顔を出しています。

そして今も「鉄平石（てっぺいせき）」という呼び名で、

建材として使われ、この地域が全国で最大の産地だそうです。

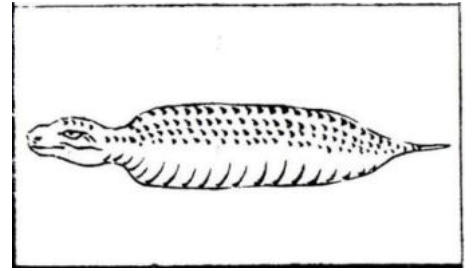
片石重累の図



またまた蛇足です。

この信濃奇勝録はまた、「つちのこ」の画像を載せている事でも知られています。ご紹介しましょう。「野蝮 (のつち)」です。場所は木曾の山中一石峠 (いちこくとうげ)、8月頃たまたま出るとは云うものの、遭う事は稀だそうです。大きいものは長さ1尺2~3寸 (40cm余) 太さ1尺回り。

「あえて害をなすことなし」と、「無害だ」と述べています。



ツチノコには足がありませんから、蛇足と称するのは当たらないかも知れませんね。

宿の予約の事

予約の取りにくい事で有名なこの宿。

幹事の苦心と、予約できた時の喜びの様子を、その日に届いたメールでご覧下さい。

何と今から7か月前、今年3月1日の事でした。

2019.03.01 役員各位

美ヶ原の「王ヶ頭ホテル」 さすがに予約のとれないホテル、手ごわかった。

予約開始の8:00~、携帯、固定電話双方でかけまくり・・延々話し中、ようやく10:30につながり、部屋を確保できました。

私達のこのツアーが成立するかどうかは、予約できるかどうか懸っていました。

幹事の喜びは半端なく、ご本人の談話では、もっと具体的な苦心もあったようですが、ここまでにしておきましょう。

(その2 2日目) に続きます。